

国際政治アナリスト・後藤昌代

# 私の地球紀行

サハラ砂漠にガラバゴス、北朝鮮やアフガニスタンは当たり前、  
果ては地球の天辺・北極点や、世界の真下・南極点まで行っちゃった……  
時に民族衣装の「コスプレ」にもいそしみつつ、女ひとりの地球旅！



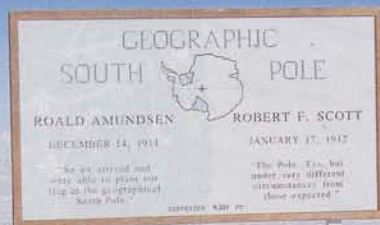
民族衣装の「コスプレ」も旅の楽しみ。  
イエメンではبدوウイン族の女性に変身



ロシアの船で「北極点」へ。その帰途、  
原潜クルスクの沈没事故に遭遇した

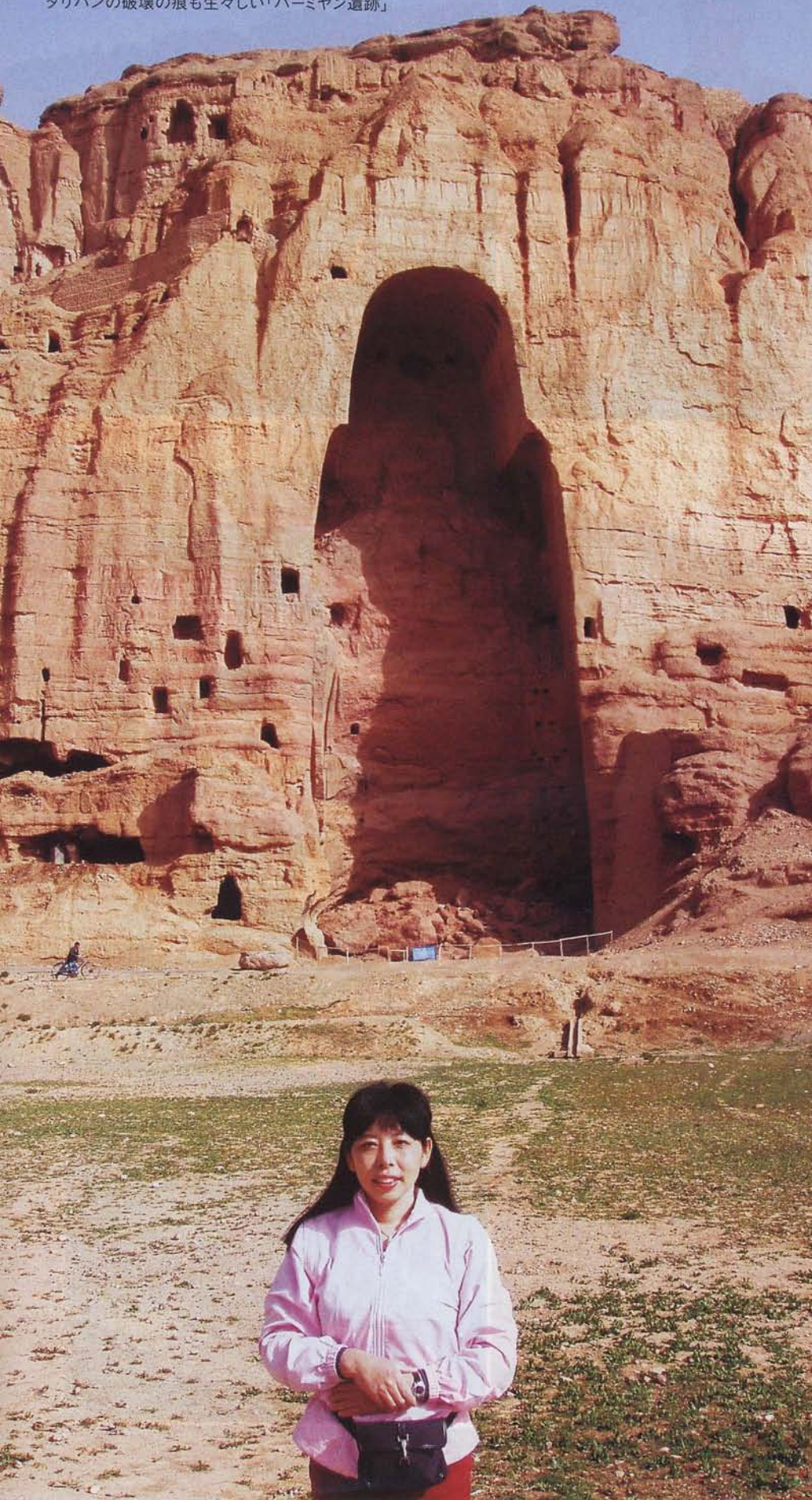


エクアドルで「赤道」をまたぐ



2003年には、ついに「南極点」に到達





**お**

金と時間さえあれば、世界中どこにでもいける今。とはいえ、北朝鮮や中近東の紛争地帯から北極点、南極点をも制覇した日本人は果して何人いるだろう。シドニーの大学で国際政治・国際関係の博士号を取得し、現在、ある在日海外公館に勤める後藤昌代さんは、まさにその一人だ。

すでに12、13歳で「国際人」になろうと決意していたという後藤さんは、アメリカ留学、帰国後の外資系企業勤務を経て、オーストラリアの大学で国際政治・国際関係を学びつつ通訳として働き始める。多民族国家にして国民が大の「旅好き」のこの国で、彼女は「地球には何と多くの国や民族、

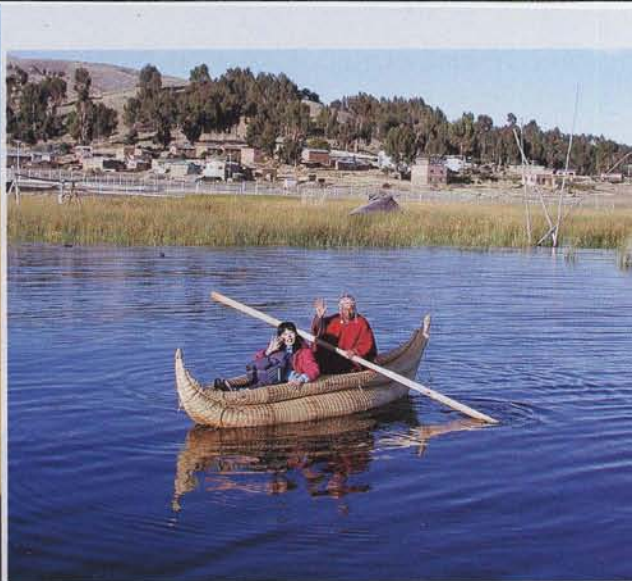
文化があることか」と実感する。かくして、マザー・テレサやサイババに面会した93年のインド旅行を皮切りに世界各地を回り始め、これまでの10年余で踏破した国と地域は90以上に上るといふ。旅の数だけ出会いやドラマがある。たとえば96年の初の北極点到達。預金も全て下

ろし約200万円の費用を何とか支払い終えたのですが、実は出発地アラスカまでの航空運賃は別でした。シドニーの旅行会社で頭を抱えていたら、社長さんが「うちが出してやる」と。君のような学問をやる人が、天辺から地球を見ておくのは大事なことだと応援してくれたんです。」

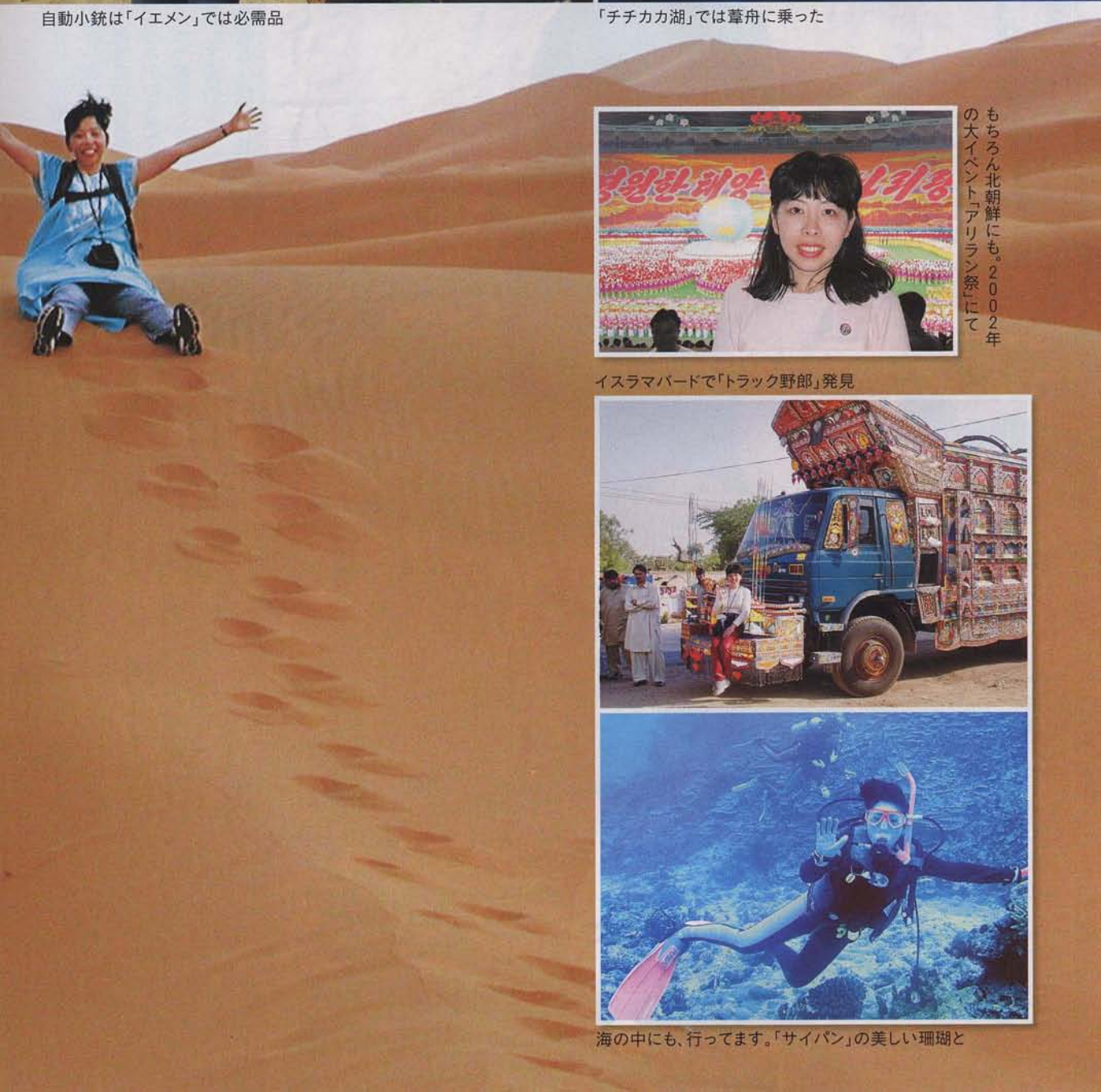




自動小銃は「イエメン」では必需品



「チチカカ湖」では葦舟に乗った



もちろん北朝鮮にも。2002年の大イベント「アリラン祭」にて

イスラマバードで「トラック野郎」発見



海の中にも、行ってます。「サイパン」の美しい珊瑚と



昨年、後藤さんは、一般人の立入り本格化した1988年以来、461番目の南極点到達者となった。「驚いたのは、最後の最後、極点近くでセスナを降りたらNHKの撮影班が待ち受けていたこと。あちらもまさか日本人が現れて喋り出すとは思わず、慌てたようですが。その様子を番組でご覧になった方も少なくないだろう。」

今年4月には、パキスタンから陸路アフガニスタン入りし、バミヤン遺跡の前にも立った。「危険な旅と言われますが、両国に何度も問合せた上、タクシイは使わない、部族支配地域では兵士に同乗してもらわない、万全を尽くしました。イラク人質を批判するつもりはありませんが、自分で危険を回避する努力は世界の常識なんです。」

そんな後藤さんの次なる旅の目的は、深海に眠るタイタニック、そして限りなく宇宙に近い成層圏ツアーなのだという。



モンゴルで「チンギス・ハーン」になりきる

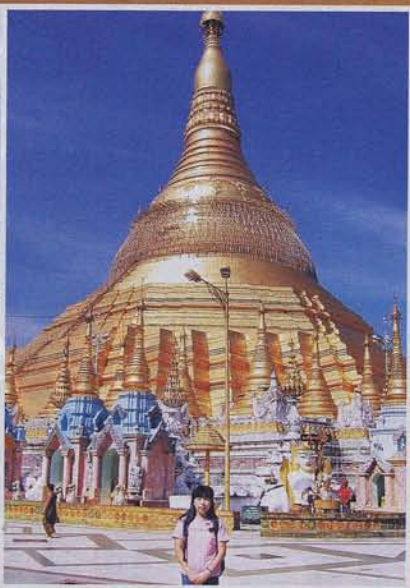


ガラパゴス名物「ウチワサボテン」と



「マザー・テレサ」や「サイババ」にも逢いました

遊牧民のバオにて。「婚礼衣装」を着せてくれた



「ミャンマー」のシュエダゴンパゴダ前で